

第4話 ムーチービーサ篇

風の島の小次郎餅

1

お元気ですか。年が明けて3週間が経ちました。最近はやでも気温が上がらず、時々パラパラと雪が降っています。

この島では雪が積もることはないで、いつか大きな雪だるまをつくってみたいな。

この前、丘の上のガジュマル広場で餅つき大会が開かれました。「風の島の小次郎餅」は、

やわらかくてモチモチ、ほんのり甘いんです。炭火であぶるとこげ目がついて、ぐ〜んと

香ばしくなります。私はしょうゆをちょこんとつけて食べるのが好きです。

餅つき大会では、ヒヤッとする事件が起きました。「注意して食べてね」と言った

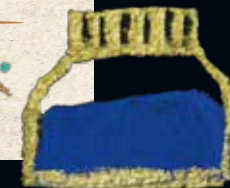
次の瞬間、ヤマガメオジが餅を喉に詰まらせて、ひっくり返ってしまったんです。

みんなで起こして、甲羅をポンポコたたいて、ようやく餅を取り出すことができました。

あのときは本当にこわかった！

息を吹き返したヤマガメオジは、ボロボロと涙を流していました。どうしたの？

と聞くと、気を失っていた間に鬼の小次郎の夢を見ていたそうです……



2

今から 400 年前、城山のふもとの洞窟に、

小次郎という鬼が住んでいました。小次郎は

気が弱く、優しい性格の持ち主でしたが、と

てもコワイ顔をしていたので、島のみんなから

恐れられていました。

島には鬼が1匹しかいなかったのも、小次

郎は友だちが欲しくてたまりませんでした。

寂しくなると、島の子どもたちに「遊ぼう

よ！」と声をかけるのですが、いつも逃げら

れてしまいます。どうしたら友だちになっ

てもらえるだろう。城山のてっぺんやガジュ

マルの木に登って、小次郎はいつも腕を組ん

で考えていました。

ある日のこと。小次郎はおいしそうに餅を

頬張る子どもたちの姿を見て、いいことを思

いつきました。世界一の餅を作ることができ

れば、友だちになってもらえるはずだ！

やる気に火がついた小次郎は、自分でもち

米を育て、収穫して、蒸して、杵と臼でついて、

コロコロと丸めました。しかし、出来上がった

餅はあまりおいしくありません。これじゃ

ダメだ。……くそ！ 今度こそ！ 小次郎は

辛抱強く、何度も何度も餅を作り続けました。

3

そして5年の月日が過ぎたころ、小次郎はついに理想の餅を

作ることに成功しました。やわらかくてモチモチ、ほんのり甘い

その餅は、いくつ食べても飽きません。よし、これならいけるッ！

小次郎は島民の家を1軒ずつ回って、玄関に餅を置きました。

「なんだ、この餅は……うん、うまい。うまいぞ！」

「誰が届けてくれたんだろう？ ……このお餅、おいしい！」

「……んまい、んまい。もひとつ。ん〜。んまい！」

餅を食べて笑顔になる様子を遠くから見ていた小次郎は、飛び

上がるほどうれしくなりました。そして、「その餅はオイラが作っ

たんだぞ〜！」と自慢げに叫びました。小次郎を見直した島のみ

んなは、餅をもらったお礼に、畑でとれた野菜や果物を洞窟の前

に並べるようになりました。「友だちができた！ オイラに友だち

ができたんだ！」長年の夢がかなった小次郎は、城山のてっぺ

んから何度も喜びの雄たけびをあげました。



くらびー絵本

風の島からの便り

絵 Sava 文 野原 誠喜



4

ある年のことです。渡り鳥のニュースさんが「大変だぞ〜！」と叫びながら風の島に飛んで来しました。なんと、大陸の鬼たちを乗せた船が、風の島に向かっているというのです。それを聞いた島のみんなは震えあがりました。大陸の鬼たちと言えば、荒くれもの集団で、ここ数年は島々を襲って悪さをするというわさが伝わっていました。

風の島には武器もなければ、戦いが得意な者もいません。長老のイワガメオジは、島のみんなを襲わないよう鬼たちを説得してもらえないかと小次郎に話をもちかけました。しかし、気が弱く、他の鬼に会ったことがない小次郎はほとほと困ってしまいました。

どうしよう……。島のみんなを守らないといけない……。そうだ！ 毒入りの餅を食べさせるっていうのはどうだろう。世界一の餅に毒を入れるのは悲しいけれど、島のみんなのためなら仕方ない！ 小次郎は自分が毒餅を千個作っている間、鬼たちを歓迎するフリをしてほしいと島のみんなに伝えました。

5

翌日、大陸の鬼たちが風の島に着くと、島のみんなはビクビクしながら歓迎の舞を披露しました。膝をガクガクさせながら踊りを踊り、手を震わせながら太鼓を叩き、声をかすれさせながら歌を歌いました。そうして、見せるものがなくなったころ、山盛りの餅を抱えた小次郎が浜にやって来しました。「やあやあ、皆さん！ これが風の島名物のお餅だよ！

さあ、食べて食べて！」

腹を空かせた鬼たちは一斉に餅に群がりましたが、鬼の大將は「待て！」と言って、鼻をヒクヒクさせました。

「変なニオイがするぞ。……お前が先に食べてみる」

バレた！ ……もうダメだ。風の島の誰もが息をのみまし

た。しかし、小次郎はひるみませんでした。

「これは月桃の香りさ。餅に練り込んであるんだ。食べたく

ないなら全部食べちゃうぞ！ オイラの餅は世界一！」

そう言って、餅を2つ、口の中にポボンと放り込み、ムシャムシャゴクンと飲み込みました。これを見て安心した鬼たち

は、我先にと餅へ手を伸ばしてバクバクと食べはじめました。

5

おなかがいっぱいになると、鬼たちはグーグーといびき

をかきながら昼寝をはじめました。しかし、しばらくすると、

ウーとうなったり、バタバタと苦しみ出したりして、1匹、

また1匹と死んでいきました。

「お前！ だましたな！！ ウー！！！」

鬼の大將もうねりを上げたあと、ドスンと倒れました。

心配した島のみんなは、小次郎のもとへかけ寄りました。

「小次郎が食べた餅には毒が入っていなかったんだよね？」

青ざめた顔の小次郎は、小さく首を横にふりました。あ

の2つの餅にも、毒が入っていたのです。

「……これで、大丈夫。友だちを守れて……よかった」

そう言って、小次郎は息を引き取りました。

「小次郎！！ ぼくたちのために！！ ……絶対に忘れない

よ！！」

風の島のみんなは、小次郎に抱きついて号泣しました。

そして、島を救った英雄を、海が見渡せる丘の上に1本生

えているガジュマルの木の下に運び、そこにお墓を建てま

した。それからというもの、風の島では小次郎のことを忘

れないように、毎年、餅つき大会を開くようになりました。

風の島

鬼餅寒さ (ムーチービーサ)

旧暦の12月8日、月桃の葉で包んで蒸した餅を食へ、家族の健康を祈願する「鬼餅」という習わしがあるよ。そのころ吹く風のことゝ鬼餅寒さと言うよ。鬼餅寒さが吹くころが一番寒いんだ。

風の言葉

歴史には、愛と友情の物語が隠れている

